

ねむの木学園の子どもたちの絵を見ると、その絵の素晴らしさに衝撃を受ける。障害を持つ子どもの特異な資質が宮城まり子氏の自由な表現を重視する教育方針のもと、開花したのであろう。

ズアオアトリという鳥の雄が成長して鳴くことができる為には、同じ種の鳥の鳴き声を聞く必要がある。つまり生まれながらにある資質が外からの刺激を受けて開花する。人の成長に関しても同じようなことがいえるのではないか。

今日本では特別支援や多文化教育で、一般に欠けている能力を補う教育支援は盛んに行われるようになってきている。しかし、逆の特異な才能や資質を伸ばすギフテッド教育は、あまり注目されない。それらは教育格差を拡大し、教育の平等に反するものとして敬遠される。日本では外国に比べ個の尊重より周囲や集団に同調することが求められてきた。農耕民族は近隣と同じ時期に一斉に稲を刈ることで確実な収穫が得られる。この文化的特性は日本人に身体化されている。一斉教育で皆同じことを学ぶことに馴染んでいて、教育の個別化に関して抵抗感が強い。

加藤幸次上智大学名誉教授は、「個に応じた指導」の為に10の指導学習プログラム（一人学習、小グループ学習、自由研究学習等）を提唱し、それにITが有効に機能するとしている（『学校DXと「個に応じた学習」の展開』黎明書房、2024）。

画一的な教室の中で、決められた時間割に基づき、同じ教材を同じ速さで学ぶ一斉教育で、日本的な同調行動や道徳的心が育成される。それも大事だが、特異な才能や資質の芽が摘まれてこなかったか。画一的な教育ではそれに合わない子どもは学校生活にストレスを感じ不登校に陥る場合もある。新型コロナ禍の休校で、IT教育の個別学習のよさを感じた子どもも多い。

個性的な資質を伸ばす教育は教育の平等に配慮しつつ、公教育においても必要であろう。専門的指導、自由な校風、生徒同士の切磋琢磨、ITの利用などが必要である。